



「もういくつ寝るとお正月 お正月には凧あげて こまを回して遊びましょう」。ご存じこの歌は滝廉太郎作曲の、今では懐かしい童謡、唱歌である。

明治から昭和にかけての子どもたちが、どれだけお正月の来るのを楽しみにしていたかがよくわかる。男の子は独楽回しや凧あげを、女の子はてまりを撞いたり、追い羽根を撞いたり、日本のお正月のまさに風物詩であった。しかし現在では「明治も昭和も遠くなりけり」か、てまりを撞いたり、独楽を回している子供の姿はほとんど見受けることは無くなってしまったようだ。

私たち昭和生まれの人間にとっては「盆」と「正月」は特別の日であった。特にお正月ともなれば親の目も緩みがちとなり、少々のわがままは聞き入れられた。僅かだがお年玉がもらえ、新しい服や靴も買ってもらうこともできた。貧しかったがゆえか普段では味わうことのない「感動」を、お正月はいっぱい与えてくれたものだった。

物にあふれ、足ることを忘れてしまった現代社会。「驚くこと」はあっても「感動すること」が少なくなったようにも思える。未来を担う子供たちに「感動する心」や「物のありがたさ」を取り戻すことはできるのだろうか。「除夜の鐘」がうるさい、「子供の声がうるさい」としか受け止められなくなってしまった社会に生きる私たちに、いったい何ができるのだろうか。

生きること 死にすること

総代 N・M

明けましておめでとうございませう。
年の初めに「生きること 死にすること」について改めて問うてみました。
死にきるためには生きることが前提になりますが、では生ききるために必要なことは何か。

言い換えれば、人生を充実させるには何が必要なのか。私たちの享受する寿命には長い短いはあるにせよ、よくよく考えれば、日々の一秒一秒、一刹那一刹那の積み重ねであります。つまり、「この一秒や一刹那をおろそかにして人生が充実するわけではありません。

仏陀の言葉にも「過去を追うな。未来を願うな。過去は既に過ぎ去り、未来はまだ来ていない。ただ、現在の事象をその場で観察し、揺らぐことなく、動ずることなく、知者はそれ修習せよ。今やるべきことのみを熱心になせ。明日(自分が)死ぬことをだれが知ろうぞ。」(マジマーカーヤ)

私たちは、過去の失敗にこだわったり、過去の栄光に縋り付いたりし、またバラ色の未来を妄想したり、不安な未来を恐れるなどして、現在をおろそかにしていないだろうか。しかし考えてみれば、過去を生きること未来を生きることできない。生きることができないのは今だけである。行動を起こせるのは、そして変化を起こせるのは今という瞬間しかない。極めて当たり前のことなのに、それができないがために、人生を充実させることができず、死ぬまぎわになって「死んでも死にきれない」と嘆いてしまう。

毎日の一秒一刹那を大切に過らしていききたい。



明けましておめでとうございませう。

本年もどうぞよろしくお願いたします。 住職

今年の主な行事予定

- 一月十一日(土) 光受寺懇親新年会
- 二月十日(月) 十日講
- 二月下旬～三月上旬 観梅展・秀瑤書院展
- 三月二十日(金) 春分の日
- 春の永代経
- 八月十五日(土) 戦没者慰霊祭
- 九月二十一日(日) 秋分の日
- 秋の永代経
- 十二月十三日(日) 報恩講・門徒総会

今月の掲示板

かなしきかな
良時吉日といひよめ
天神地祇をあがめし
卜祭祀をつとめとす

『正像末和讃』



令和元年～令和二年へ

除夜の鐘

心温まる一年の始まり

今年の大みそかは、午前の天候の荒れ模様から、どうなることやらと心配されたが、穏やかで暖かい夜となりました。おかげさまで例年以上の参詣者がありました。

十一時少し前にはすでに最初の方が並んでおられ、撞き始めるころには長蛇の列となっていました。小さな子供たちにも撞けるようにと持ち手の紐を長くしたことから、一人で撞いて満足げな様子が見えられました。寒さや眠さをこらえて、こうして足を運んでくれる子供たちや親御さんを見てみると、決して未来は暗くはないと心強く思われたことでした。

本堂では書道展も開いており、おぜんざいを食べたり、ゲームをしたりして皆さん楽しんでおられました。

今年には令和の初めてのお正月。心豊かになれる一年であつてほしいものです。



良時吉日をえらぶとが、卜祭祀というふうな占いや祭祀を重んずる私たちの思いの根底には、罪福信があるということだと教えられます。

凶や禍(わざわい)は避けたり、排除していききたいし、吉や福、幸はできるだけ引き寄せたいと私たちは思っています。

しかし、私たちの身に起こってくるものは縁に従って様々に変化し、私たちの思い通りにはいかないものなのです。条件が整えばどんなことでも起こるし、どんなことでも起こす身なのです。仏教の名の下で、仏教を変質させてしまっている私たちを「かなしきかな」といふ言葉で言われているのだと思います。

年賀状

今年も多くの年賀状をいただきました。

そんな中に、今年で年賀を失礼しますのも何枚か含まれていました。

その理由が「高齢となり」がほとんどの理由でした。日常会えない人とのつながりが唯一年賀であつたように思いますが、こうしてどんどん人との繋がりが切れていくのですね。

さみしいものです。

梅々と準備を整えて

梅の木はすっかり葉を落とし、花芽をしっかりとつけています。開花はいつ頃になるのか、楽しみが始まります。

梅を「縁に今年は誰に出会えるのか。これもまた楽しみの一つなのです。」



新聞原稿募集中

あなたの日頃の思いや考えを確かめ、まとめてみる機会にしてくださいましたら幸いです。

ぜひ「寄稿ください」